源氏小〻見 之

源氏目録巻之五　宇治十帖

一　橋姫（はしひめ）うえそくたいふ
二　あ宰まれ
三　屋とり木
七　うれ糸
九　手ならひ

二　椎（しゐ）かもゆ
四　さいらひ
六　あつまな
八　かけろふ
十　夏のうれし
　　法の師たいふ

宇治十帖

一 橋姫 うはそくの宮をいふ

はしひめとは姫と云事ハかの大ねの斎よ
まうし姫のうち給とくしてそやさて
さかひのしつくり袖そめあり
花も宇治のかしひめの事院まてよあやう
かくしつれ うちわたし 中宇治よりかくれ家として(お)はし
宮ハ桐壺の御門の八君宮かくしはれ
とくそりしまいせんかんれくてゐのあり
しゆかしゆのまへ 其薩院の御たちかくしきくれしまへしへま

まわりしうまへて此八の文をいくらぬ
りそてまつらもやなと乃くとこの
きまりけんうまへ面もきりん源氏なれ
けんよかうとわりひまりてしふとも
さかくわたしまつり八条よけ家をさく
すまもまふ此八てうの御家さへ面けは
後はいと後まりしく和のと図のしむわ
をわりして宇治に山里もち給へまを
ふ和りうけりすまもまふそれより宇
治のうやとも面りて御なしなとわる

してすまのふいとうにくしさひめ君
二人もちそてまつり給つりあんとてさ
くおりしてそくなりしとこなもやすの夫
さしは文ハ法道のそうしやすておはし
まつ用とまうりつ大将とくのまつりて相
なとなしひそてなりなりしかな
もひそてまつりてかよひし程よひめ
君さらしもおりふんをてしひめの答
もよめつなりは姫君さらの母君ハ大臣
のはむとめしておもやしういもうとの

思ひえみてまつりて御てしらめく
なりや給ふきものし文はひしつきいてそ
くしなりとさすかに思ひしりさふらふ
まかりもわりなくへこと此世よ
有明の月とまてしひて給ふのや
うしくなりゆき事するこそわりか
あわ大ねそのしらはしやうの中ねよ
てたてまつる此姫君をそらといふし
くみてゆくしくなみほとよつれわ
さはましてこ里いふとなかめて

ひとりとくまる　ふるさとこれなく
さけらひ　夜の霞の立と見捨る
初へいはる
なとこ申はくへし　めてそく　ふゆき
又ふるさとの名殘のおしきんのとはしへ
うら川うましきや
なとつ事も
あるへし

又寄木（やとりき）

はゝき木といへるかたちのうらみかく
こゝまてしらぬ人のいひし
はゝき木とおもひしはこのすゑ
そらひ孫もいふはゝひしかまり
といふ弄のあなりけれはうちの大君うせ
そこひて後とし月つきしもかはりたね
なけきまさりて中の君はいまふ
ことのかのこゝろなりて京よりむかへ
まもりは宇治の宮いとあはれてなと

ありくかのくにゝてはよれわれおも
をやてまよなしてこゝふたちん
とをてゆゝゆきけれはまゐりてかへ
しの年かよりやゝし年のきもあ
ゐよりきなまりてあまりふなりてらと
家の宿りよなりしのみなよあれしは
てけんしめくしく日まくれねきさい
とまりのひてしゝのひしなりそて
このきよふかみ家いのうりのあとゝれ
にしとめ去の文ゆりかしそとしあら

合せしに給て附めりせまふ文ハかの中れ
君とうさりなくおりしめしていけり
相とはせん事とかしもんりか
まなけさまふまそくなりしすさ人なり
まふ八月ありしらかさりのれうへれ
えしまとあてもこちまけ出かん程
のんかれさ人面りなしとをやしを
おりしたけてけよわまもけりする
事なりれ枕とそんそてくなりめ出
給へもまた明の月も面りくすこのほり

ひ面くなる風のをとむしのこゑく
まもむしのあさましかりし山さとの
と面のよりねうくてよしをひし
山さとのねのけまをかくろり
あまし心秋の風はなりき
とよしをひしなりあさましかりし山
里のすまのよりはこやこはすしうれか
といつ事相のうらめしきまゆひよと
つ合をて付きをまへしさりかしに交
ゆまは夕さりのおとしまかよんをまふ

ひまふかりつ大ねまての事なれはれ
中ねの君とはいとれこしくおりしさ
事なれはほ○よ以文てかたしかな
ひまふ世中のうめしき相うりほと
てうくるまておもしていうるをん
まことはさし○ともひとりしく
まいのうつり書しをうきと文とあ
いてうしゑのふうちとけてんやをさ
うさなきは文ものとうふかたしまして
うさ私のあるきは相ことふりよかれ

てなきこの家ふきむとふおもふのねよ
ゆきことふさし出してうらまの○かたを出
詠んして文なつりしき程のかひさきわ
利きをひてかひをとりことなりして
黄鐘調のしらへひきすさひ給ひてしまし
うた
かよ出ぬ物なりしものすきき
まの○たりとの寝しまくして
女君の御母事
秋ちかなれへのきしきもしれしき

はるへのひさらてまうでたまへる山かく
ならまし小風のをとひゝきつゝおとろかし
くもゐふしたなく袖もしつくめまて
山たちよそへぬこのしの露けて
あやなくの給ふことわりなみなくぬ
なとくちさひのひてるまて入はふ
ほとよらくたちまつよ梅のをとかすら
よけむきこゆれはあさひよひしと成
鐘閣よきこえてひゝすさひそうさうと
とかきしくよせゆきなかのことくて称

そこなりしろくて川なるのひくきれ
の風かりまあひそうんらしてるひき
とめくせ法へはは文は姫君さらあを
ひまふなりへし屋をとし入てとの井人は
爲法へは文は宇治山のおくにあしやうと
とてそこにときひきりあり空きは
てく鉢んつけとつとめまはしまうへのかり
まふかりしなきは御留主まていとか
しりなりはとの井人はんをあはせて
のそきまへはいとあれはしこけり

てみをそうくまをあきてゐしらうれ
まゐうくれくろちをもまさくつまり
く雲うくれうる月をしのそれく
はまの石角をあつさなくてもまゐくへり
きりしの法へはと一人はしのうへにさ
ふさうつまて
陵王入日をかへし事をよりたへなり
入日をまゐくしも以へさまことふもしく
うちまひなしそうをしきことを
いひしをそさうくうつかしくあふ

まじらひなりふみなとはあふさなしその
なりけれは御こしくもひしとてあら
はさかつりかり宮ほとつふせは
心さなわらし御ゐ
こやこりうちへ入事
ほのと　うち
わりなけれはまつ　とのゐ人
さいのおもりを　川なるそく
なにかし中将へ　御もとまいる弁宮
とひし女房はしかりのまことに風ほく

たりんのうえれめ乃ことなり世をとし諸へ
く西國の交(とつぎ)領(めん)の書(め)に成なりしか後に都
面のかりてこの文より姫君たちの御
ろうにてさふらひかりひめ君たちの御
母さまはすくしもそなれさりしゆへより
板この文にてかりは君んの君は宰相(さいしゃう)の
中ねたのひてをいめんしてはしれ
まれをとうりきうそつとおもれなり
さまおもひて此弁の君をも語して
かりはとくしかふれたりんれうえいま

ものさはりいふとして此文へそてま
つらんとて弁の恵めれとなれをいい
とさし事をとてとり出してかれに
さてまつる唐の淳泉後にてぬいそら
袋の中にたまさかにからひしの色
まゝ云まひはかゝ日にてかきそらの
のわりいかなしむらふかそてまいる
ゐさしおりふりわいそてまつらうき
しさしとてそてくまつりとりてみる
まへはつりはさらうへにとりふりじか

きこりあくなともめつゝふみ程こそつく
しけれんすきハ大納言の子ハ鳥のあと
乃色りてかの君の生れ給へる中し
くるしき中文にきこへてかゝるを
のあへなく口程しき事しもとこ侍く
しうきそりきふしめやさハ子年乃
こさんしやとひちと気してしり
てくりなりゆの中とりあハ
せて宇治にてやしかのこ姫のふ
色りつるとし付きゐへし

二　椎の本

はまとしゐりもとく云事かりの所よ
さらかるんけとそのこし共かりを
むかまことになりけるかな
といふ哥思ゆへなりけうくそくかく書給
ろん雅をくなりてかりの書いのうに後へ
まうてかふまゝ文つかりもおもしれなり
けんちしてまいの四さ乃以会仏よ山へ
そまりんとまや姫君そらしもおのかひ
とさなとしおふまかりも初へいまと

入ぬる秋のくれきさとうしの山も見
付く程に孫にくらへてなりぬ見ん
ておもしろゝよ文ハまらし給ゝひ給
ひとくうらむわよの年頃なしの
年ころそくやきそのひそそ風もり對
面あるてむかしく成のひし年わ
すとかなしき我も老けいりかしきを
なしいかりよなしちさるひしゝり
わりひ出く治氏実のいつりかれまさ
まひて後あまうらとけんして共升り

りしの弁といふしなり云弁かりし
宇治のまうれなと云事あらはさとり
あるせて付させるゝ事し交くれるゝ
事は私なり又宇治の中庭とも川勢
まうてなと云事あらはせ是は二月廿
日ころなり人しまりふ長部臣の交はうも
そくの交りかかる大ねまいりかよひ又姫
君さらとも心よくきさ海よ起るりや
とき語ひし泪とよ人しきとゆりも
たりしくあるふもしせへまいりるふた

かくいふ宇治の中将よりのゆつりをれなる
名をも桐はなの君とそらのえもしらぬひけ
あひしらひしもの人めしきさうりむひへ
のくにとも人ありのひしうけ浄井よかな
ときくにりのふ宇治の中将とい十婚
中よりわきて取ありさもちらすまり
て中将といふゆたのやまつりも
わきてうつりせきて
ちちへし
まる

三 総角（あげまき）

いまそあげまきと云事かゆるに所ま
大君りよそてそてまつりしなり
あげまきにまなりにちきりとむとひとめ
むなしおりよりさもあるん
といふ所のゆへなりよめるんいうんそくに
きやれ一めくりまれ以此事姫君さらいとな
ふんりふりかりも事くいへむとてまたつと
まひてよりし也みるあ○君
めきもあへとりろきなみさのまれとま

なりきこちさりといひしむとりん
とのをひてはせよんつらくてうせをひし
なりにつりとの兵ともんかけての法ひ
しかともあ○兵をかくんかけくうきひ
うとあるときみのうつりをすしゆく
屋うなりしかはおとこれうさいんやすく
ておんしをうは中の兵と一ところは
孫をひておとこの親のしきれいなんをう
一兵ちりきをひてあ○兵くれをふと
ときりをふ中の兵はつひよりそれとも

あらさりきれいとめつらかようめし
もてなふとなくかたらひをきてうつり
まふ自然郎の文は中そちしてあ
ひまりて後には二条院のましのそい色
むかへ色をひてつりしなしまうきまり
しなり相文はけらんしたしめていと
いろなるけんまてしたしく宇治へかよ
也まふほとは母きけさうんとみとす
給ひてけうやとしたちことはおりひ
まり給ふ文なれはうるくしをしふ

といさめそてまつりたまふて御心より
御人おしいむ人のひて御病せしなと
との御ひて御心にまかせぬ婦女は
さはおりひし事なりとつひしも心
かしく見をのみなけきくし御ふ
御ふらもなふとるくなゆまし見れ
もしまゆはけけてしなくなり心
とのみつくおりひ立のふくてしかふ
女は御心もおくれもていかしくと
おりひのみてとるけき道なきはすらく

しもひ立清らて林からこしわかれ
みゆげんやんと生立のふして宮清へ移る
し国さんの嫌なり乳母しかゝりてぶ
くらのへておそひのふ文はおそひ
まはらもいらて御中居よりのこか
うあ居とききかの文ともりとを
あのは井てはまうんそのところ志
さめわられさらりん清へとのかひ
そとつまかれし人まてきてさらまく
このきてうきえいし庭のくらしとう

せみをはりへりふる間より大変のはひ
とく上達部(うんたちめ)変の大臣なとをてまゐ
りてかろくしきにありき人をくな
まてよのをめしまなりぬへしなと
あきれことをつくりしくてんなしを
むなしく物をふさしてかゝしつゝん
とんくりしきなにことにしかいく
こそをけめとまれしよふおもしか
もはけまはいりゐへしとつく姉きを
かりしめしれていとにんらもしく

しくなりりてゆきてうりつ大ね屋にて
まし[illegible]よ此中の志をそしつりみと
おりひてうんなりすへと[illegible]いひとさて
御年二十六にてくきすふ大ねいさり
なくおりひてとてりにいまよりて
とやうてかくり語りとおりろを八事に
とわしとるくらりにしふらひわり
法いをなきをいとく山里さひしをふ
りとはむ宮よわとはをもひてうし
を袖の水とけさりしおりけよいと

なけきくゆへまふかゝる事とはくへし
あをまれんつよりしなけきなとも
ことよせて付へしゆゑのかくまちうき
ゆとうてかつりしなと云事あるへし
これらハ うら山 うら川 もみち

なと付へし

四 早蕨（さわらび）

いまさいらひと云事うたくの文にそ
のこれりして念佛なとふをこりしと
そのかりもおもしましそりしむ
つまのもうらの中の兵姉兵にをも
きてそくひとりなりめたしまし
あへるのもしめにいらひ給くし
たりしをなりかこり入てそくまつる
とて

この事はそれよりゆんせんなれ人の

こころよはめつらしのさかひ
ししわり中の君ハ君のひかりとみんかふ
よ君やしれしそしまてわかひ
らりと姫ミのいそのミかりかまの
うらひとよ君したつきそしたはさ
のかはえのうやのひしもゐかそうらま
まりて婦文れなけきとかひかふ
ゆくはせて乃二月よかりか若紗れ文へ
せんてまのひていとめてそうそ乃
こゝろえ

かのりく風りはをてことしき
とよしをひしなりさて女若まもしゆれ
ことすしめくひゆをなりをふう相の事
をことしふとりてにくへしとてよ那
まのさまひにる時の事なきはんうつ
をしかるちねのをつさらし時か仲
の若なしとおもしまれいあひのてよ
あらりそりし事を色いきるしのあひ
のことてりあらうこれも安ゆつさり
のおとくのうへおもしまを御手のあさ

いつきよりふしあきつかつねかれ
紀とありてあつきのふりとさて歯
うりのまふあさゆかしとみえく斎は
斎のふハあるの悪のうしもゆふらんは
ちてまいしぬとみてまうしとなり
ゆさかやしさら孫あんり
よみくてちうへりまりちて務の
らうりりとさしあさうかの紀
とみうりしあさうかあつさなと
うれういかふかし云事よみえしりてゐ

うゐふるきくつひとりなむ
にしろうしきこうくれり給し
てうしもちのれまし（て）あひあく
らしくをらひきらのしらひし
まゐりやうのあいこの中の君たちの御
それのはあいなり中納言きそてまはう
為しりかれるに哭泣て後うちえく家
時の人もやうなるを成しは
家のうちなくなりやしく時ありてあは
車のやうまはりをれりしめくるとて

さを御ひそれはうらめしかるべしく
おりしくいてくとつまやれめふなるいひ
しらとうゐくしき姫君とうしまりて
母人しきとおもひしはさてそれ後か
しのことも出いてきそうふもゆめく
をとしとすてなしゆゑ年月ふる
ほとりしまうりふも成りふいかし
てちく文のゐうへしらをまゐんとおひ
くはれれさあひよりくかくとゆし
とおりし出く故ちきしのうしゐんり

元をそてまつるんとたねをかたり出
させをひまつたねもさりとおりしまつ
う奇なり

みしへのうし海なりは月ふそへく
こひしきせしのなてりのよせん

とよるんしうはあつくつきそうかて
るんなしの旬を付へし相たねはそうさ
いつ姫君女三の文をそきつりていたん
りのめんかくふりあらんされたるさへ
の事とつきれを宇治へおくしそれん

いひめ君を門せんまゐりまゐらせよ
中屋とりしてかの弁のおもにたるへ
きなきよりなれば屋とりて相こりをと
するとあるの小君よんをあるやての
うきてゐるさまへもいましへのひめ君
まもいてくわりし文の小のこゝまも
みさてまゐりをきいんかこりしく
は弁よあふ人の事をうしあつまや
まもうき毎まもをなしひの君も
これらは宇治の中屋とりも門せまゐて

まゝみなとの事宇治にてあるへし
宇治十帖の中にさくのうけ物の巻と
いつゝ今は此書にかゝるを大臣けの御
むとまとり給ひんとてよのそしつと
とかゝしく女二の文の御うたの菊え
なしとてわりし給ひきりたへは殿とふそ
まりあつと御鈎あきはそれしかまつ
ると中中にてこゝろかゝる中納言な
利とり別めし出してかのさくとうけ
物にて御巻うたせりふ宇治の御うたまを

さゝひてまつへきゆゑとのこま
ひしうし中納言心してありて
よのはかなきこと殿よりけふあなれは
らるゝのまうしふありて見えまゐしと
とやされしはうらの院さ女御殿と
し宮さ○ともとのこまかひたり
宮よみへとうれみかそのこまかと
のらり乃々いあせてもあらる
とれかやうきてしてふしりまゐりて
ゐみひくまうりのふゐやすへきや

次のとしは夜のさしりは夜はかしてあ
乃宴しまひて夜ふくその夜大ねは此と
夜宴うつ所ゝ也給ふなりその夜乃夜ま
てかの出りんのうへは
はさへし夜と
大ね
ふける
なり

六　東屋（あつまや）

はゝとあつまやといふ事かりの弁は
さしもむつむつしやまきれあつまやの
わかりけりかうあそこきれ
とりわ弁のゆへなりけりいへや我れの
こかりてよかけりましのひそかりしひ
めのとと母さらんのかねとふ人をとては
むそふらんとやしそうそれとは
ちかうもやけきていあうしとはきてい
とをきむしこしわりひてなかんとつ姫は

ひさうしてむこふとりいと口わしかな
りしく文のかゝるのけりとへはきてゆ
えてあつきやゝはれかゝけゆゑのゝま
ま文さしのそゝをもひてとりくいひよ
つきひしほとよめれとあさましかな
かりてあらくしきかいふとりちゝ
おりかくしとさねさてたゐ殿宮御へ
たゝしてかの弁乃あまをまつ居りと
そもまひく我もかの三条のそひ所へ
かゝしそりとの弁人東(あつま)と思ひてそ

そやなとのくちりとりあしその時れ
弁なりうくてそのありつきより四車
まのをて宇治へはきておかしてを
まやまふそひのいふなとく云事まハ
じくあまそくさあつまやとの弁
へなと云事付へしあめすこしふり
なりしなり此八九月なりさて大ね
ゐちしく宇治へまゐるを

まふ

七 浮舟（うきふね）

匂宮うき舟を中の君の方によ
そながらほのかに御覧じて
このうへゆかしくおぼしわたる
とふ事なりけれはゆへあつまやのほとりに
おぼしきをひて宇治よりとてと
ときかしひしほどに参つけのうへや
かのかの御巻のまはかれなりしかひ
人をいたはり給ひて忍びて
くれて御のこともしらひそてまいり

つきみにいひまきらはしてすき
ゆかしきよのしゝ御目よ文はいとゝ御
ましてうちときてれいし御こゝよ宇治
ものしてうつゑひけしきつよ付て文
さもありてはまへならまいへあらく
まつりそゝり文いはくもの文ありける
しうきりしきみとりてはんきさい
いとこきやうなる女のをなりあやうく
ありし大ねして宇治へはかよひ
給へいつきしもよるけてはつるへ御

くそうの○ゆへいたりくとゆかりし
ゆせすうのまふりのゆえまひし秋の
夕かりしおもとうまたわりて志ひ
て出すふまつりそきわるらりのそき
てゆらんすきいつうきれしこまきは
えたり人しつまりて後大ねのおもしま
そうまし○としくみらしていしかを
たらうましき事わりなく人まちて
ましとさくなりやすふにしていとうくまね
ひすふめきたりそうゆりひなとも

まゝ御くりのし右をとゝ云女房出てに
うゝまつる梅さらやうの間へ入てもそく
ろねのおもしそうとおもひてうちと
きぬぎてもあらぬ人なり後まゝしきれか
しめやともうひそなきまゝかゝもかゝ
もかりひもまゝぬちさりとは元なり
あかつきくらむとおもしつきともさう
まさらもれきうくまことにあらへく
おもしまゝひてにこをとてくこ日は
とゝまりまゝそのかりこそうらんを

ありてあさき瀬もしくなりへとも松
ひさしくあそよめのまいるりたま風く
わたりきこ事もとうまくてたえ
のへなりまつ梅んしつよらくまりて
あさりんわたしてとはさやと時の
ままのあんとはいりてやんとあくりきよん
てくしなもなりふといこきとひつゆくれ
りてつまくそなそろりくなる
しかれもうらなひきてやうそ
つほとのあさりわつらさりわかいな

うへしさて次のあらはさせんとなく
なしひなりとのうきぬくひ居ふ
風のともいとおもしくしもうき
まあきまれまふ所なりてくりまふ
そのおりえの所哥
よふしらを風とふへきなされまそ
なみこしもうちとかれくしつ
うきふ所也事
なきとも思ひなき神ませきのひて
いふまれとしもしつきあそ

なとついうちしまふおりひまもぬ事か
とふハ行くへし人そう人なと付へしかく
ても拾ひしさハやんさなくなふと
すへさ取りなくてこやれ物つきなや
うやとうこはきく又ものいて出すふて
の人めもさそうふて川よりとらまに
取とをりまひてちいされ舟よのり
まひてさしわさとよろうなうさしに
こさられきそうんぢらしていたんか
そくまぬの月乃すものりて水のれ

りてくりりなきよこれなんたらるの
小鴨と申て御母さしとくめそうをみ
御へはたやうなる岩のさまりしてされそう
ときは夫のうけ志まれりうきゆんさまへ
る年をつつさんとりのかうさをとゝ
まいて矣
としつきかんしおうそちるの
小し岡のさ夫よちさうらう御へ
とのさまいしみるそうし弁の女也
極こそいうき母の君なともいひれ

さて女らつてきさきなもひて御
あしりて見しつるわれらしてゆ
やまさとつきめしてれゐなしうれて
さひて女男のわりしふうらさひろ
をきさしてはよひてあしろやと
れなきさとうけてのひしれおも
うけてきしてまれうてわりきめ
はつゐよわしろ屏風とそてたりそ
わしこく
らくつき　忍　歌し

川よりとら　あしろ屏風

花こる宇治の川よりとらなといつる
よりくなしその後又かゝる大ねなし
ましまりそこまつしをかなしを
てうらしありて称さるを大ねなと
をなるをさゝぬ面ゝてうらしろよ
こそとんくるしをてこまなくなく
はをさるかなといとんまさりして
あそれもつくおりしてもろともり
なしをく出まひてありつしなくさめ

まふかりの弁

宇治にしのなりにちさりかくらせしを
あやつむさまうゝ御さはくか
とよみしなりくて二三百してかつり
まふまもありけこひしくおりふまいとお
こうましくさて夏よりはんあくうれく
きいなりとさへおもしかりは夏のかひ
もしこゝろせきりとなり大ぬれは使
と夏のはつかひとそひくりあひ
うんそれよりことあつきて大ぬれさ

しらすのまへもてていとこそいし
りそそてなとこそあめくたねの
みとりかのこゑの御せうらてて
なきこゆるしもたちはさのれ
まうんとのこかのいまつか
と宮給へのまひとこしそう御あそて
きねとかりひなきくゆくふらし
文のゆつひのあさあかりの文乃
色いさくさり給てあさしあゐあ
らうさ中みしあいさくさり給ひ

なといふ文とはきへしさてうさ無お
もひみさきていくせんと力をうしき
まゐり文おもして東門し給へとも
との井人さひしりて因へも入事に
とくいひて以つゝひ右をまわひなり
出つき面うもなけきハ侍臣とて右をと
おなしんなる女房と文のおもし国を
取へなてまつりけれとも人のしまにの
せんとすきとも元のゝ○もりかれを
そうせてさぬのすそとりて立そひく

らあつえいはるまてしもなつほなかね
をはきてきりあひてものゝけのへし
すふありもんなはきてるみありとも
こくとしなしくのそけきこ山のめ
あつものゝたさよなかすまてなきを
くものさふりさひそかねのて
なくよとしなふもなかくなきに
こかしのしらしき
山のものたさ　さしひそかね
かみりしき

なしいふ事をうき毎なしに付へし
極なくして変りて也のひぬ物語にあさ
まをうたりけれは女きりんまくらをう
くたりゆしてたぬ人をかれたる所
にをとさそれはこと変もおもしまを
とていろきむかへ事なんとて門敷に
望をふ変はそれよりさはにむかへとり
くにんのまくふとおほしくにめのれ
いゑ九条あたりなる所へうへ御ものなん
と人しきをかまへ人は女はいくなりを

ゑけつき方ふうとあれをひてとふかに
ワカをなき物はなさるやとおもひな
つまりことゆりなりまやかをとし時乃
ふ思をさくゆもワカのをさ而とあ
きまてうをさぬりしゑ国ゆりさをひ
て人の称るまふつきとしあをて
ゆくつきしも志らをいかに神をし
あてよくしとなきてえんより是を
つきおろしく鬼まても神まてもつ
きをはきてゆをうしとなれをひさ

るよかの文とおりしくおとこの悪衣
をうさなるゝ出きていらせ給へとて
うさいうきて捨くこれいうさまなり
とりりてゆきけるよ平木院のうしろ
よ大なる木の下よ捨てりしと小野
のあきたのせりり下向よ此平木院
より屋とりそりまるりまんつきてとり
て小野へゆきて屋うくかちしなきさ
せいうとりて人となしなりて後を
あまふなりしうされい宇治よ来ると

いふ事をわるへし

本国りとかし

ところハ三月ハ

ことの

事

なり

八 蜻蛉（かけろふ）

昔をかけろふとて云事ははかなき事のあとか
たのくらやて後かりにもはかなくもあり
うきよのはかなきことのたとへにもひく
かけろふのあはれなる事とは見え侍るを
ねくるとも春もあつらぬ賞しかきろふ
としこのひへあつ之梅のこと兵うしとよ
めさとあてころもなけりしろ毎ひな
けさとしつらへし人めも傾きしく
てのしとさえきりゆきらけゆなまてう

こなたにありめくもりひの原よとく
つきくゆ楽なくつりしなりし也
かきろつし云申あつし
あしかさなき　氷のあいしこし
のちつみきや　まつりすつらん
なし云事待人もいひとすよはしあき
こふかる所まものふ給ことひも女房
ときとと後い文れはくえいひ給く
御母中宮のはてりはつらむてく
しれはとみよはらんしまり

九　手習（てならひ）

此書てならひと云事はうさ毎小姓
のあるまに書られて小姓よすみを
まあらぬよふにしまきらんらして
そまきりワラ力の事をもつる里の
事をもつつさなれはそくにくく
と手ならひをしてらくつまじひ
ておりふまをとも所まよりし書て
この書より手ならひの義と云ふへ
しをのくあまのとりしたしめは此（あま）

八十えりなる母ひさつきてこゝ也まいりて下向に宮浴に座しりはあまのあま山にそ行ときひきりしてあるもはきこうきうほとにうしの末の下にあやしき掘ありなと人のしるを行てこれはいとうにしきけるさ母しきあやのうにりうもなんてならぬ御きえ後きそりはあまもせまてかしきの夏をみんとりとくはひきりりからせ御なとしてに

きゆくりてなしいとしこのひを
かよはあまのしをめろうなくなり
そうしうかのしてしりしをしれを
小姓へはしよきまうは人をうんてむ
しのはうしりしてしきりよいひを
そうまうはやうひてしろうしきる
とかりひてあまのえもけやへまいり
うりまうまふしりひしりうるさ
まひそうかるよいひて君よなりを
かうして君まく初のましともおりひ

出しけく力をなきんとて出たりし
よ家とおりひし人よはきてゆくとこ
しより力乃ゆきて志ハ志るといふな
ほとりんと儀ましくおりひて弄よ
力をなきしなみさの川のもやさせを
志ひらんかけてそれかとめし
月のおりし海さよけくなりめて
うく海よは秋のゆふへとよりしとし
なりむる神より霧そみつる
秋かくなりゆきハ大きさの見物し

きもあはれなるまして相なりし袖
のよかりひ屋るへしとゝ和かのはき
里の夏と和なるやしに里より今
とうしいりて山まさうけろ春
きゝれけしまく風のともいとゞ
そし門田のいひうとてまうきとん
とものうたひ相まれいしつゝ見さひき
なりともしんしあつまらのたりしくあ
はれなり月のあるき夜うらなりあて
四きうてうき世の中まめく風とも

あはれなりしを月のみやこる
こゝふかきにほひのをりけれはなきは
もわさましさりしとも見えはへて候へし
しおりふもいとあはれなり見えし成
めきていとゆかしのこひしきにて
梅やのはなちりさき紅梅乃色もかをり
ころねも見やゆかしのしこしさかよ
つましられなんかし

袖ふれし人こそ見えね梅花のかの
それかとにほふ春のあけほの

梅太しゆうかりひうまぬゆうりよ出
まひてそつひまふ
小野よへ此前の
ことゝ我かりひく

付
[illegible]へ
し

十　夏浮橋（ゆめのうきはし）

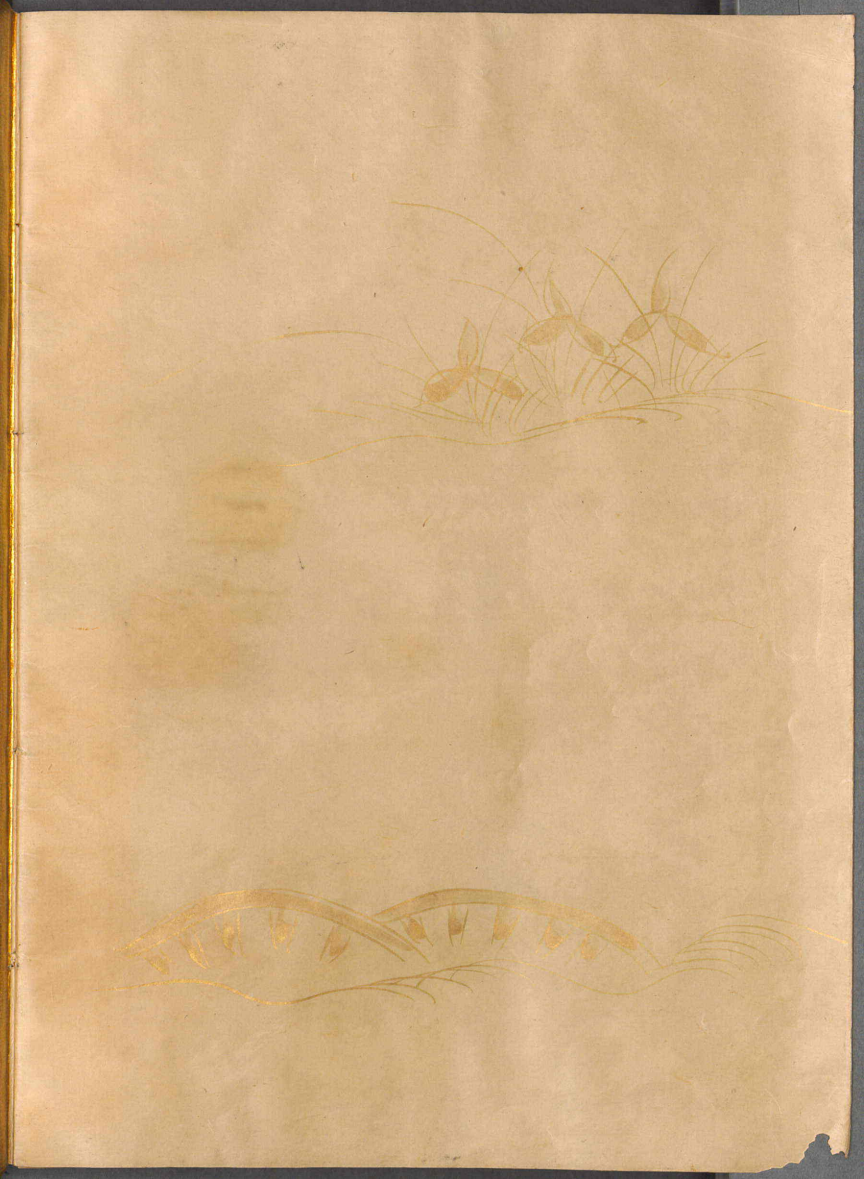
法まで ゆめのうきはしと云事源氏にも
男いまへの栄花（えいくわ）とはしめに男のさえ
もらふまで思ひすくしたまひて
うちはひうとさへいはまほひて
よいうしかたはしまし事もまた智識（ちしき）
にして雲うくまのふ又ハ結ぶこと義なり
かくにくまいさせも掛うりもてい
ふる事帝をもちせんそめなれ夏の
うきはしとはいふなりはしとこと

そのなとめに夏のうきたしとは云
つきて此まゝ大ぬきいてしまひて
此ほなしひの恵のかくひそらのうきう
子をしりしのなくさめにめし出て
ほうらせまふをほつひまてほ文をほう
つきうゝ志るへなくてはいうとてかの
人をあまりになしせし僧都よりもて
文をとひて大ぬのほ文よりそへてゆき
しなり大ぬのほ文より
ほのしとそ何ぬるみちを志るへて

あのみね山よりいでさせたまふか
しかりしなりしのにはそてにかなは
されはたちとのえしをあしひのあはれの
中さしてたきめ御世中よいはゞ
ゐあさきものなりしてかなしきか
よいゆへなり
そのくちやまちの露しまかせと人の祥り
てさ月猶あひて對面し給へりし紀
つきて侍りそれは千宗紀行なれきこゆ
はなし

夫生死無常の雲あつく本覚無明の月
出ふし三界の洞に入ひて夜の裏若し
をもしとおくく万胡にもうけうこ人
界に生るゝ事梵天より糸をおろして
大海の底の針の穴をはらぬくよりも
うきうし又佛教にあへる事は一眼の龜
の浮木にあつかりしとかゝる世にあひ
なる事とも悦んとしてかたちのよき
にゆきり妄想天さうの乾しとも小はさ
きてあひよくのさはなりて法ひ乾事

文まなしされは世尊の席の所算
りをつけとも世務のいとゆえまやえ
と雪山乃鳥は目とりなけとも上みり
を出て長まねされは文もまゝ屋もそ
てしなけまはとんを取り家をとまえま
そめとんあひゆるうそんの事をいて
きかんかうじ井のんさし深くして長
実のかうとんしやれとてなり　徳行
世常は天よりの橋　是生滅法はあひとれ
川をまさる事　生滅く已は釈の山をこ

る車　寂滅為楽ハ成佛の間也と覚る
鄭会の意の中にハ心を三明の月にも
座禅の座のよりハ眉に八字の霜をさ
きさまんとかりひてをゆく世をいとひさ
まゆへしたりしとはうち担会繪語の物語
にまつさいりしたんたりのかうさん
とうくたりなはなとうはさとりとえん
さんんを逃ふしてなさけつきれも
慈悲城にしてかんなうらへし大和
斎ハ乞丈大たりしたりの佛をはらな

なりされいそきまひうきて成佛(じやぶつ)する
ひなしといふ也